

はじめに。これはタレコミでもらった資料ですが公開します。内容について完璧に精査したものではありませんが、独占せず公開すべきと判断しました。

お伝えしたいことの結論から先に書くと、確信を持って言えるのは、

1. 村木厚子氏と奥田知志氏は遅くとも 2012 年 10 月 17 日の時点で厚労省社会・援護局の「生活困窮者自立支援法」の審議を通じて繋がりがあり、
2. 2013 年 4 月 29 日までには盟友とも言える仲になっている
ということです。

また、確信までは持てないものの、

3. オタク文化をバッシングの標的にする現在の形を考えたのも、仁藤夢乃氏ではなく村木氏サイドであり、その方針が固まったのは村木氏が厚労事務次官として肝煎りの「生活困窮者自立支援法」を成立させた 2013 年 12 月 13 日時点から、仁藤氏がキャラ変した 2014 年 4 月頃までのどこか（※あくまで村木氏の話、WBPC と関連が深い APP 研や矯風会は昔から表現規制派）、
4. 村木氏（と奥田氏）の目的は、フェミニズム思想やオタクバッシングなどを通して「社会的孤立」「関係的困窮」（「関係性の貧困」）などの福祉上の概念を世間に浸透させ、これらの曖昧な用語が条文に入った「生活困窮者自立支援法」「困難女性支援法」などの厚労省による福祉関連法案を成立させること、
5. そして曖昧な条文を解釈するには有識者会議や特定のモデル団体が必要となるため、そのグループを独占し、そこに対して公金が流れるようなスキームを組むこと、
と推測します。

さらに、上 3 つよりも大胆な推測ですが、

6. 村木氏は仁藤氏を簡単にはページできない、というのも仁藤氏の『女子高生の裏社会』（2014 年）は、村木氏が「生活困窮者自立支援法」改正（2018 年）に向けて「社会的孤立」「関係的困窮」（「関係性の貧困」）という文言や概念をステマするために、村木氏（もしくは奥田氏）周辺のゴーストライターが書いたものであり、
7. 仁藤氏にこれを暴露されたら、関連政策も含めると年間予算約 750 億円の「生活困窮者自立支援法」について、同法成立を社会・援護局長のち事務次官（2012～2013 年当時）として直に主導した村木氏の責任が問われるから。

一部は以前某掲示板の某スレで類似の指摘をしたことがあるので、もしかして既に知っている部分もあるかもしれませんがご容赦を。

以下、資料と議論（資料 15 まであります）。

(1) 2013年4月29日

第144号
編集者 グリーンコープ生協ふくおか 理事 倉田 隆
編集委員 倉田 隆
印刷 株式会社印刷センター 印刷センター
TEL 092-482-7770 (和)
ホームページ http://www.greencoop.or.jp/

グリーン・ウェーブ
5月号 **GREEN WAVE**
グリーンコープのうねりを地域へ

今月号の主な内容

グリーンコープの市民発電… 2-3
私のおすすめ商品… 4-5
ファミリーサイクルショップ
ゆうきあい寄附誌… 6
中間就労・抱樸館3周年… 7

同紙 p. 7

お知らせ

抱樸館福岡 三周年記念シンポジウム

日時：7月27日(土) 13:00~15:50

場所：大博多ホール

【一部】記念講演 「あきらめない」

村木厚子さん(厚生労働省社会・援護局局長)

【二部】抱樸館福岡3年間の取り組み

館長 青木康二

シンポジウム 「伴走型支援による地域創りとは」

問い合わせ先：社会福祉法人グリーンコープ
Tel 092-482-1964(和田)

資料1：グリーンコープ生協ふくおか機関紙『Green Wave』第144号（2013年4月29日発行）、<https://greencoop-fukuoka.jp/pdf/1305.pdf>

まず、グリーンコープ生協ふくおかの機関紙によって、グリーンコープの抱樸館福岡という社会福祉施設で、2013年7月27日に村木氏が三周年記念シンポジウムの記念講演を行う予定だったことが確認できます。



資料 2：グリーンコープ共同体機関紙『共生の時代』第 279 号（2010 年 6 月 1 日）、
https://fukushi-greencoop.or.jp/hbk-fukuoka/images/06kiji/10064_51.pdf

そして、抱樸館福岡開所式の時の機関紙を見ると、当時グリーンコープ副理事長だった奥田氏の肝煎りの施設であることがやはり確認できます。奥田氏の講演で注目すべきは、「関係的困窮」に対する制度の必要性を訴えていることですね。この用語については後でまた触れます。

本題からは脇道に逸れますが、後に東日本大震災で話題になった部落解放同盟の松岡龍氏や、学生運動時代の ML 派活動家で当時グリーンコープ理事長だった行岡良治氏などの名前も見えます。

なんといっても、参加者で特に目立つのは、厚労省の「社会・援護局」がこの奥田氏の事業を大々的に後援していることです。来賓として呼ばれた清水美智夫氏（旧厚生省出身）は、村木氏の先々代の社会・援護局長です。とすれば、村木氏が奥田氏と知り合ったのは、個人的に仲が良かったとかではなく、この頃の社会・援護局からの人脈を引き継いだものでしょう。なお、清水氏と村木氏の間社会・援護局局長だった山崎史郎氏（旧厚生省出身）も、村木氏ほどではないにせよ、抱樸や奥田氏とよく一緒に現れることが多いです。

村木氏は旧労働省出身で、旧省庁単位での派閥は先代・先々代と違うので、奥田氏は厚生族・労働族という旧省庁単位ではなく、「社会・援護局」という部局単位で厚労省の官僚と親しいように思われます。

資料 2：グリーンコープ共同体機関紙『共生の時代』第 279 号（2010 年 6 月 1 日）、https://fukushi-greencoop.or.jp/hbk-fukuoka/images/06kiji/10064_51.pdf

そして、抱樸館福岡開所式の時の機関紙を見ると、当時グリーンコープ副理事長だった奥田氏の肝煎りの施設であることがやはり確認できます。奥田氏の講演で注目すべきは、「関係的困窮」に対する制度の必要性を訴えていることですね。この用語については後でまた触れます。

本題からは脇道に逸れますが、後に東日本大震災で話題になった部落解放同盟の松岡龍氏や、学生運動時代の ML 派活動家で当時グリーンコープ理事長だった行岡良治氏などの名前も見えます。

なんといっても、参加者で特に目立つのは、厚労省の「社会・援護局」がこの奥田氏の事業を大々的に後援していることです。来賓として呼ばれた清水美智夫氏（旧厚生省出身）は、村木氏の先々代の社会・援護局長です。とすれば、村木氏が奥田氏と知り合ったのは、個人的に仲が良かったとかではなく、この頃の社会・援護局からの人脈を引き継いだものでしょう。なお、清水氏と村木氏の間社会・援護局局長だった山崎史郎氏（旧厚生省出身）も、村木氏ほどではないにせよ、抱樸や奥田氏とよく一緒に現れることが多いです。

村木氏は旧労働省出身で、旧省庁単位での派閥は先代・先々代と違うので、奥田氏は厚生族・労働族という旧省庁単位ではなく、「社会・援護局」という部局単位で厚労省の官僚と親しいように思われます。

自治体や、財務省、そして最終的には法案を審議する国会議員の方々を説得するのに、現場で支援を行っている方々の話には、とても説得力がありました。

たとえば、ホームレス支援をしている人たちが積み重ねてきた「こうすれば生活再建につなげていきやすい」というノウハウ、九州のグリーンコープが行っている家計相談が生活の立て直しにとっても効果があったという実績、あるいは埼玉や佐賀にある団体が行っている学習支援によって、生活困窮世帯の子どもたちがドロップアウトせずに高校に進学できたり、高校を卒業できたりしているという成果。それぞれの支援策が、困窮した人たちの生活の立て直しにどのように役立ってきたかを具体的に伝えることで、なんとか納得してもらうことができました。こんなふうにしてできたのが「生活困窮者自立支援法」でした。

一口に法律といっても、つくられ方はそれぞれ異なります。業界団体がしつかりとあるような場合は、役所と業界団体が中心になって法律の中身を検討していくこともあるでしょう。そういう場合は、自ら陳情できるパワーがある当事者が主体になることができます。しかし、先述したように困窮者はそういう人たちとは違い、なかなか声が出せない人たちです。そこでこのときは、困窮している人たちを目の当たりにしている支援者や理解ある自治体の方々が大きな力となって法律ができました。

資料3：村木厚子『公務員という仕事』（2020年、<https://amzn.to/3GV7fVM>）2章1節「新しい法律をつくる」

さて、村木氏の著作を見ると、前記のグリーンコープなどの事業を参考の一つに「生活困窮者自立支援法」（2013年12月13日公布）を制定したと村木氏本人が証言しています。村木氏とグリーンコープ（＝副理事長の奥田知志）の関係が、ある時点から法に影響を与えるほどの強さにまでなっていたことがわかります。

なお、グリーンコープの一つ前の「ホームレス支援をしている人たち」というのは名指しされてはいませんが、おそらくNPO「北九州ホームレス支援機構」（後の抱樸）の代表としての奥田氏は含まれているでしょう。

では、「生活困窮者自立支援法」を通じた村木氏と奥田氏の関係は、いつまでたどることができるのでしょうか？

資料4：同『公務員という仕事』2章1節

そこで2章1節の前掲箇所を少し遡ると、同法制定には3年掛かったと述べられているのですが、村木氏は最初からこの法に関わったのではなく、その後半部分を担当したそうです。2012年9月10日に内閣府政策統括官から社会・援護局長に異動したので、その時から関わったのでしょう。

また「社会保障審議会 生活困窮者の生活支援の在り方に関する特別部会」という部会で、ホームレス・困窮者支援をしているNPOの人たちと議論を重ねたとしています。

2012年9月28日 第8回社会保障審議会生活困窮者の生活支援の在り方に関する特別部会議事録

社会・援護局総務課

○日時 平成24年9月28日

○場所 航空会館大ホール（7階）

○出席者

委員

上田文雄委員	岡崎誠也委員	奥田知志委員（森松代理）
柏木克之委員	勝部麗子委員	柳部武俊委員
小杉礼子委員	駒村康平委員	高杉敬久委員
武居敏委員	谷口仁史委員	長谷川正義委員
花井圭子委員	広田和子委員	藤田孝典委員
堀田力委員	松井一郎委員（古川代理）	山村睦委員
宮本太郎部会長		

○議事

○宮本部会長

定刻になりました。ただいまから第8回「社会保障審議会生活困窮者の生活支援の在り方に関する特別部会」を開会させていただきます。久しぶりの特別部会ということになります。この間は委員の皆様にも新宿、千葉、横浜と関連施設を暑い中御視察いただきました。行動し汗をかき部会としてしっかり情報収集もしてきたと思っております。

それから、この間人事の異動がございました。今度は村木局長という卓越した行政手腕を持つ、私も個人的には大変信頼を置いている局長がお見えになりまして、そのことに全く問題はない、ワエルカムなですけれども、他方において厚労行政の継続性を考えると、若干不安をお持ちの委員の方、関係の方もおいでかもしれません。あるいは10月1日には内閣改造も予定されているということです。

本日は、これまでこの特別委員会にも大変御協力いただき、たびたび御出席をいただいた西村厚生労働副大臣、津田厚生労働大臣政務官に御出席いただいております。厚労行政、社会的包摂を目指す政策に関する政権としての一貫性、継続性ということも若干含めて、2人から冒頭御発言、御挨拶をいただければと思います。西村副大臣、いかがでしょう。

○村木社会・援護局長

社会・援護局長を拝命いたしました村木でございます。部会長から、汗をかき行動する特別部会というお話がありました。その事務局としてしっかり汗をかいていきたいと思っております。よろしくお願いたします。

2012年10月17日 第9回社会保障審議会生活困窮者の生活支援の在り方に関する特別部会議事録

社会・援護局総務課

○日時 平成24年10月17日

○場所 グランドアーク半蔵門 華の間

○出席者

委員

石操委員	岩田正美委員	岩村正彦部会長代理
上田文雄委員	岡崎誠也委員	奥田知志委員
柏木克之委員	勝部麗子委員	柳部武俊委員
小杉礼子委員	高杉敬久委員	武居敏委員
谷口仁史委員	野老真理子委員	長谷川正義委員
花井圭子委員	広田和子委員	藤田孝典委員
藤巻隆委員	堀田力委員（清水代理）	松井一郎委員（古川代理）
宮本太郎部会長	山村睦委員	

資料 5：「社会保障審議会 生活困窮者の生活支援の在り方に関する特別部会」関連文書
(https://mhlw.go.jp/stf/shingi/shingi-hosho_126703.html)

そこでこの特別部会の議事録を見てみると、村木氏は2012年9月28日に初参加しているのですが、この時たまたま奥田氏は欠席していて、森松氏という方が代理で出ていたそうです。ということは、村木氏の局長就任後の部会で初めて奥田氏が出席した2012年10月17日の会合が、少なくとも公的なレベルでは二人の初の顔合わせだったかと思われます。

なお、「赤べこ」こと藤田孝典氏の名前も委員として見えます。

以上の資料から、村木氏と奥田氏は遅くとも2012年10月17日の時点で、厚労省社会・援護局の事業である「生活困窮者自立支援法」を通じたコネクションがあったことがわかります。

翌 2013 年 4 月 29 日までには、奥田氏が自分の肝煎りの施設の三周年記念講演に村木氏を呼ぶほどになっている訳ですが、これは開所式に当時の社会・援護局長の清水氏が来賓として呼ばれたことが前例になっているでしょう。とはいえ、先々代の清水氏はただの来賓で講演はしていないし、先代の山崎氏も（奥田氏とは割と親しいにも関わらず）抱樸館福岡の記念式典に呼ばれた形跡がありません。

先々代・先代の局長と違い、わざわざ抱樸館福岡で記念講演を行った、ということは、遅くとも 2013 年 4 月 29 日時点で、歴代社会・援護局長たちの中でも村木氏は格別に奥田氏と仲が良くなっていた証拠と思われまます。

次に、現在我々が知る性格の仁藤氏を 2014 年 4 月頃にプロデュースしたのは村木氏であり、2010 年代半ばからのオタクバッシングの流れを考案したのも仁藤氏ではなく、村木氏（もしくはその側近）によるもの、その当初の目的は 2018 年の「生活困窮者自立支援法」改正に向けて「社会的孤立」「関係的困窮」という概念を世間に認知させるためだった、ということの推測についての資料と議論。

村木—私が取り組んでいる若草プロジェクトの代表呼びかけ人のお一人は瀬戸内寂庵さんです。京都に庵をお持ちなのですが、そこをもちよつと社会貢献のために使えないかなというところで、少年事件をすつと手がけてきた大谷恭子弁護士に声をかけたのがきっかけ。

私は私が拘留所にいるときに、若くて可愛い女の子が刑務作業をやっていることが気にかかっていたんです。灰色の上下の作業服を着て職員さんの指導もものすごく素直に聞いていて、なんでこんな子が刑務所にいるのかと不思議でしなくなつて。検事に「あの子たちは何をしたの？」と聞くと、「薬物か売春」と言われました。近年日本で刑務所に入る男性は減っているのですが、女性は減っていない。女性の犯罪で圧倒的に多いのが薬物と窃盗なんです。こういう人たちの多くは婦子の被害者。家庭内の虐待であつたり、レイプ・性暴力の被害者であつたり、厳しい環境の中で、逃げ込む先が薬というパターン。あるいは若い女が一人で稼げるのが風俗ということもあり、このような状況になつてい

るのがわかつてきました。

今中—決して本人だけの問題ではないということですね。
村木—私も子どものころ、家出したかと思つていた時期があります。五〇年前のことですが、当時考えついた行き先はやはりホステスだった。今の子は、携帯電話さえあればそれが実現できてしまうんじゃないですか。そうでなくても渋谷か秋葉原に行けば、メイドカフェで働きませんか？と声をかけられる。だから子どもが悪くなつたとか倫理観が薄れたというよりは、社会の落とし穴とか崖がすくく増えていて、深くなつていっているのだと思います。国があれば女性活躍と言っているにもかかわらず、彼女たちは自分のせいではないのに、そのスタートラインにも立てていない。非常に辛い環境に置かれている子がたくさんいて、そこをちゃんとフォローできるようにしたいな、と思いますね。
最後は政策が肝心だと思いますが、行政が悪いと言っているだけでは物事は進まないの、自分が先に動き出しながら、行政を引っ張って行くということかな。そういう意味では、今中さんがやってこられたことと似ているかもしれないですね。

多くの方に助けられ、三七年半務めた役所を四年前に退職しました。民間人として始めた活動のひとつに「若草プロジェクト」があります。貧困、虐待、DV、いじめ、性的搾取、薬物依存、育児ノイローゼなど、さまざまな社会問題に翻弄されながら、SOSを発することができないまま苦しんでいる少女・若年女性の支援を行う団体です。豊かな日本の中で、少女たちの「生きにくさ」はなかなか見えてきません。しかし、大阪拘留所で若い女性たちが薬物や売春の罪で服役している状況を目にしました。そして、彼女たちの多くが、性暴力の被害者であつたり、厳しい家庭事情の中で追い詰められていたことを知りました。家や学校に居場所を失つて、家出をしたり、夜の街を徘徊したり、そんなときに手を差し伸べていれば彼女たちは刑務所には来なかつた。何とかしようと仲間が集まつて活動を開始しました。

「つなぐ」(生きつらさを抱えた少女たちと支援者をつなぐ)、また、支援者同士や、支援の現場と企業をつなぐ、「ひろめる」(少女たちの現状に関する社会全体の認識を高める)、「まなぶ」(少女たちに接する機会のある人が、その実状や対応の仕方を知り、)を二本柱に様々な活動を展開しています。同様の活動をしている他のさまざまな支援団体の支援も大事な活動目標です。

この活動を通じて、若い世代の支援団体のリーダーたちから大切なことを教えてもらいました。女子高生サポートセンター「COMBO」代表の仁藤夢乃さんには、日本の公的福祉はすべてJKビジネスのスカウトのお兄さんと負けていると言われました。机の前で待っているのではなく、夜渋谷の街に出て、一人ひとりに「今日泊まるとこある？」、「ごはん食べた？」と声をかけ、すぐさま温かい食事と寝るところを提供してくれる。「管轄じゃないから」なんて言わないし「お家に帰らなさい」とも言わない。仕事も紹介してくれて、「君みたいな子がうちに来てくれたよかった、頑張ってるねえ」と自尊心まで回復させてくれるというのです。

また、NPO法人「BONDプロジェクト」代表の橋じゅんさんも、少女たちにとって「立派な大人」は数層が高い。彼女たちの「戸惑い」と「葛藤」を知る信頼できる大人になつてほしいと教えてくれました。

この分野の若い支援者やシェルター、施設の努力を見ると、JKビジネスに負けないためには覚悟がいると思います。そして、行政の機能には限界があります。だからこそ、官も民もみんなで協力していければと思います。こんなふうに、私は長い時間をかけ、いろいろな人に導かれながら、「福祉」を学んできました。公務員時代は「行政として何ができるか」を考えてきましたが、今は「みんなで何ができるか」を考えています。「かっこいい福祉」もみんなで考えたい。この本の今中さんとの対談はその一歩になると思つています。

資料 6：村木氏と今中博之の共著『カッコいい福祉』（2019年8月31日発行、<https://amzn.to/3Zuogx3>）

この書籍の「対談：バリアフリー」は村木氏の（表向きの）アキバ観がわかる珍しい資料で、（渋谷や）秋葉原のメイドカフェを、子どもを墮落させるような「社会の落とし穴」「崖」と表現しています。これは仁藤氏の名で2014年に書かれた『女子高生の裏社会』で、秋葉原が児童売買春の温床とされていることと対応していると思われます。表から見える時系列順で考えれば、一見、村木氏が仁藤氏の報告の影響を受けたように見えます。

では、村木氏は仁藤氏自体をどう評しているか。同書第1章の冒頭部「行政はJKビジネスのスカウトに負けている」を見ると、仁藤氏について自分に大切なことを教えてくれた若い世代のリーダーと称賛。具体的には、日本の公的福祉は「渋谷の街」のJKビジネスのスカウトのお兄さんにすら、アウトリーチ活動などで負けていると教えてくれたそうです。

でもこれって違和感ありませんか？

確かに、「渋谷の」夜の街について詳しい仁藤氏というのは、デビュー作『難民高校生』的なイメージではあります。でもなぜ、より有名な「秋葉原を中心とするオタク文化を性的搾取として告発した仁藤氏」のことは褒めなかったのでしょうか？ この路線は共有しているはずなのに。

しかも

2020.12.02

#SDGs #1 貧困をなくす #4 質の高い教育 #LIFESTYLE #子育て #家族 #教育

#泊めて#死にたい#パパ活… アキバの「まちなか保健室」に来る少女たち

コロナで人生がいったん閉じられてしまった



なかの かおり

ジャーナリスト

プロフィール

厚生労働省によれば、児童虐待の通報で児童相談所が動いたケースは2020年1月からの半年間で9万8000件余りに上り、過去最多のペースとなっている。コロナ禍で居場所がなく、家出したり虐待されたりする十代も増えたという。特に女性は、性を売る仕事に流れやすい。望まない妊娠を防ぎ、心身を守る支援が必要だ。メイドカフェや萌え産業の多い東京・秋葉原近くに、一般社団法人「若草プロジェクト」が開いた「まちなか保健室」を訪ねた。

「萌え産業」低年齢化の秋葉原

なぜ東京都千代田区という都心にあるのか。「近くの秋葉原には、メイドカフェや耳かき店があり、そこで働く未成年が多い。保健室はもともと、繁華街の近くでやりたいと思っていました。

新宿・渋谷・池袋と、繁華街の多いエリアを見ていくと、秋葉原はいつのまにか少女の居場所になり、風俗につながってしまっていると感じた。他のエリアより、圧倒的に若いです。赤い羽根募金の助成が得られ、3年は運営できることになりました」(大谷さん)

保健室のスタッフは、弁護士やカウンセラー、看護師など専門家が中心にシフトを組む。持続可能にするため、時給は払われる。今年4月から準備を始め、7月にオープンした。ゴールデンウィーク中も、ひそかに受け入れていた。



秋葉原の中央通りの写真。若者の街といえば渋谷・新宿のイメージが強いかもしれないが、秋葉原の街にも多くの居場所のない少女たちが集まっているのだという Photo by Getty Images

資料7：FRAU『#泊めて#死にたい#パパ活… アキバの「まちなか保健室」に来る少女たち』（2020年12月2日、<https://gendai.media/articles/77904>)

若草代表の大谷恭子氏へのインタビューによれば、2020年に若草が赤い羽根基金の助成で秋葉原近くに「まちなか保健室」（某アロマテラピー施設）を開いたのは、児童売買春の温床になっているアキバのメイドカフェ（大嘘）などから少女たちを救うためだったようです。

なお、若草2020年度事業報告書p.2には「まちなかに学校にあった保健室みたいな場所を若年女性の日中の居場所として設置できないかと、前年度から画策してきたが」とあり、前記『かっこいい福祉』が書かれたのと同じ2019年から大谷氏・村木氏らの中で構想はあったようです。

このように「アキバの深淵」なるものの解決に意欲的な姿勢を取っている村木氏サイドですから、もし、オタク文化バッシングの発想の経路が、仁藤氏（2014年が初出）→村木氏サイド（表向き2019年が初出）であるとしたら、仁藤氏への評価は、

「秋葉原の問題について、私より5年ほど前から先鞭を付けてくださっていた若手世代のリーダーがいることに、とても誇らしく思います」

とか、そういう褒め方になるはずですが、しかし、実際にはそうはならなかった。

認知プロファイリングすれば——勝手にそう呼んでいいのかはわかりませんが——これはつまり、

「オタク文化バッシングの発想の流れは、村木氏サイド→仁藤氏」

であるため、この点で仁藤氏を褒めるといふ発想がなかったのだと推測します。

では、村木氏は一体いつからこのスキームを画策していたのでしょうか？ 何が目的でオタク文化叩きを？

一般社団法人Colaboの分析 (14) ノンポリ風の「お姉さん」が、反基地フェミニストへ向かう過程のツイート像

いいなー行きたい! 笑 来週あたこあえみとセブ行く(^^) RT @Larikko: 昨日はマニラの高級クラブREPUBRIQに行ってきました、

テキーラとシャンパンとアラブ系金持ち男を全身に浴びて果ててるのがいま。

— 仁藤夢乃 Yumeno Nito (@colabo_yumeno) August 24, 2013

冒頭は、フィリピンのナイトクラブ (ただホスト・ホステスの接客する店というより、ダンスするところである) で遊ぶ友人のツイートに回答した2013年の仁藤夢乃氏だ。今なら「これも別の搾取。我々は自覚的にならねばならない」とか「貧困と格差こそが問題」と「アラブの富豪が潤う一方で少数民族クルド人は」とでも本人が批判しそうな内容だが紛れもない彼女のツイートだ。

一般社団法人Colabo (以下、コロボ) 代表の仁藤氏は前々回お伝えしたように、2012年後半に一度Twitterアカウントを削除している。そこで得意だった下ネタや、アニメファンな様子、またAKBなどのアイドル風のダンスをしていたりした過去を削除しようとしていたのだが、実はTwitter上でのキャラクターが、フェミニズム路線に移るのはより後である。ツイート内容とまた著書、そのほか報道歴を確認して何が仁藤夢乃とコロボの現在形を形作ったか見てみよう。



(「Twitter歴チェッカー」より)

今のTwitterアカウントを使い始めるのはリンク先サービスで調べて分かる通り、2013年1月14日からだがキャラクターが政治的なキャラクターを売り出すのはより遅く、意外にも2014年の半ばくらいからだ。現在はコロボ活動報告書によると河合塾コスモに勤務していたスタッフがある程度、SNS運用に関わっている節がある。積極的に投稿までしているかは不明だが、仁藤氏のTwitterから誤字脱字や文法ミスなどがなくなったことは確かである。

自派			4	1	3			2
国務府		5	3			2		1
国庫	1	5	22	5	2	4	1	2
共産党			1		1			1
性理院		12	3		1	1	1	31
セックス	5	5	13		3		2	1
新倉		1	3	2		1		2
米軍			7	1			1	1
裁判			1	1	2	3	4	3
JK	9	138	57	10	39	19	15	4

(同じく仁藤夢乃氏ツイートのワーディングとその年。2014年にJKを爆発的に増やしてから「JKビジネスの仁藤」をアピールするようになる。また2020年からはそれまでもあった「性搾取」が急増して、2021からは「共産党」の色彩が強くなる)

彼女のTwitterがフェミニズム的な性格を強くするのは2014年、それも「女子高生の裏社会」(2014年8月に出版)の執筆時期の4月頃からである。つまり2013年3月のコロボの法人立ち上げから約1年ほどは明確な方向を掴みず手探りで足掻いていた、あるいは手練れの釣り人のように「入れ食い」となる釣場を探して「アタリ」をつけていた時期とも見える(※注2)。

資料 8: エコーニュース R『一般社団法人 Colabo の分析 (14) ノンポリ風の「お姉さん」が、反基地フェミニストへ向かう過程のツイート像』(2022 年 9 月 9 日、<https://echo-news.red/Japan/What-Nitos-Alcohol-Preference-Shows>)

エコーニュースさんの調査により、我々は仁藤氏の振る舞いが「正義のフェミニスト」に変質したのが「2014 年 4 月頃」であったことを知っています。『女子高生の裏社会』(同年 8 月発行)を執筆していた(とされる)時期です。

エコーニュースさんの予想では、当初の堅実路線では Colabo の資金繰りが良くなかったので、仁藤氏本人や稲葉隆久理事が新しいキャラ付けを考え、その結果かつての左翼活動家路線に復帰したのではないかと、ということです。

確かに、仁藤氏サイドの事情としては金銭面が理由でキャラを変える必要に迫られていたのかもしれませんが、ただ、その 9 ヶ月ほど前に、仁藤氏サイドより上でもっと大きな出来事があります。それは、

2013 年 7 月 2 日: 村木厚子、厚労事務次官に昇進

です。村木氏はこれによって退官後も大きな権力を振るうことができるようになったのが確定したので、より大掛かりで大胆な計画を組めるようになったのでしょう。ただ、村木氏肝煎りの「生活困窮者自立支援法」は 2013 年の通常国会(第 183 回国会)で一度廃案になっており、2013 年後半の村木氏は秋の臨時国会(第 185 回国会)再提出に向けてあちこちを駆けずり回っていたようです(『福祉新聞』2013 年 8 月 5 日 <https://fukushishimbun.co.jp/topics/622>)。ですから、実際には同法が成立した 2013 年 12 月 13 日まで、村木氏は他の大プロジェクトを構想する余裕がなかったと思います。

とすると、村木氏が新しい構想を練ったのは 2013 年 12 月後半から 4 月半ばぐらいの 3~4 ヶ月ほどで、そこに新しいキャラ付けを模索していた仁藤氏が村木氏のジャンヌ・ダルクとなることを承諾して、2014 年 4 月頃に現在我々が知っている仁藤氏が誕生したと言えるでしょう(その前の 2013 年 3 月 1 日の Colabo 一般社団法人化については、まだ謎が多い上に本題からは外れるので話を飛ばします)。

では、なぜ天下の厚労事務次官殿がアキバ叩きなどを画策したのでしょうか? 分野全然違いますし、もっと重要な案件はいくつもあるはずですよ。オタク文化への私怨というのもしっくり来ません。

村木氏の文は近年に書かれたものだとツイフェミみたいな言論を強く言うことが結構あるのですが（『中央公論ダイジェスト：「女子供」のいない国』2020年など）、それは（個人的な印象論ですが）オタク対フェミという構図がはっきりしてきてからポジショントークをしているといった感じで、言葉とは裏腹に、フェミニズム思想に傾倒しているという印象もあんまりしません。

ここで話は、村木氏と奥田氏が同盟関係を築くきっかけとなった「生活困窮者自立支援法」に戻ります。

公務員という仕事（ちくまプリマー新書）

●法律も育っていく

ところで、生活困窮者の自立支援に関して話を複雑にしていた要因のひとつに、「支援対象者の多くには複数の困難が重なっている」ということがありました。たとえば、小さい子どものいるシングルマザーで、なかなか安定した仕事につくことができず、掛け持ちでパートをしているうちに過労で体調も崩してしまったとか、失業し、次の仕事が見つからない期間が長く、そのうちにアルコール依存になってしまったとか。支援制度をひとつ示せばそれではなんとかなるというような、単純な状況にはない人が多かったのです。

困窮者の置かれた、いくつもの課題が複雑に積み重なっている状況は、いったいどうしたら解きほぐすことができ、困窮者はどうしたらその状況を抜け出すことができるのか、それぞれ異なる困難を抱える中で、問題の根っこにある要因を見つけ、なんとかしていけそうな方法を考えるには、当事者の話を丁寧に聞く必要があります。支援の現場の人たちは実際、生活困窮者に接する中で、共通した課題を見出していました。

それは、その個人が社会的に孤立していなければ、障害者支援なり高齢者支援なり、あるいはほかの支援制度にもっと早く結びつけていただろうと考えられるケースが多い、ということ。経済的な問題だけではなく、社会的に孤立している状態こそが、当事者をそのまでの困窮に追い詰めることになっていった。そのような例が少なくないというのです。

そのため審議会のメンバーたちは、法律の条文に「社会的な孤立」という言葉を入れたいと考えていました。しかし、「社会的な孤立」という言葉は、法律に入れる概念としてはあいまいで、当時はまだ課題として広く認知されているわけでもなく、扱いの難しいものでした。内閣法制局からも、「社会的孤立と困窮が直接的に結びつくわけではない、富裕層でも社会的に孤立している人はいるかもしれない。そこまで法律に入れるわけにはいかない」と言われ、結局、その言葉を条文に入れることはできませんでした。

それを残念に思っていたのですが、施行後三年が経ち法律を見直し、法改正を行った際には、あっさり「社会的な孤立」という言葉が条文に入ることになりました。三年前はあんなに言ってもダメだったのに、おもしろいものだと思います。潜在的な問題が表に出てきて、多くの人の目に見えるものになってくると、社会の意識は変わっていきます。この場合、二年の間に「社会的な孤立」という言葉が人々に認知され、それが生活の困窮と結びつく認識されるようになったと考えられます。確かにその点に問題があると実感した人が多かったということなのでしょう。英国では二〇一八年に「孤独問題担当大臣」が任命されましたが、日本だけでなく世界にこうした認識は広がっていくのではないのでしょうか。

また、法律に基づいて子どもの学習支援をやってみると、子どもの居場所づくりや生活習慣の改善、親への支援の必要性も見えてきました。そこで、こうした支援メニューもこの改正で追加されました。

この法律に関しては、法律の制定以降、毎年、一〇〇〇人ほど集まる大きなセミナーを二日かけて開催しています。学者や行政の担当者やNPOの人たちが実践について情報交換をしたり、残された課題について議論し、それをもとにまた政策提言をする場です。このように関係者が見守り、よりよい制度や法律に育てていくという流れができています。この法律をつくることにかかわった国の職員、自治体の関係者、NPOの人たち、学者の人たちはいわば「同志」です。公務員の場合はこの仕事の担当をすでに離れている人も多いのですが、それでも、毎年このセミナーに参加し、法律の進化を確かめ、同志との再会を喜び、更なる政策の進展のための議論に加わります。こういう関係が一つの仕事が終わった後も続いていくことも、公務員としての喜びのひとつです。

制度や法律は、なかつたらつくり、できた後はそれを検証することによって発展させていくことができます。困っていることがあれば、だれかが手を上げることで、制度の発展はより促進されます。民主主義の国なので、そのようにみんなが制度づくりにかかわることができるわけです。そして、みんなの代わりに、実際の制度づくりの実務の作業を進めていくのが公務員だということ。うことです。

資料9：『公務員という仕事』「法律も育っていく」

なるほど。村木氏と審議会のメンバーたちは「社会的孤立」というキーワードを、どうしても「生活困窮者自立支援法」（2013年成立、2015年施行）の条文に入れたかったんですね。

初めは内閣法制局から断られたものの、それが、2018年の法改正の時には、世間で社会的孤立という概念が浸透していたので、改正後の条文に入れることができた。

この概念が普及したおかげで、後には「困難女性支援法」の成立もスムーズに進んで、村木氏にとってはラッキーな出来事でしたね。あとオレンジでハイライトした部分でわかるように、「困難女性」と同じく「社会的孤立」の概念は曖昧で広範囲であるようなので、法制化すれば一部の団体や人たちによって恣意的に運用できそうです。

しかしまあ、ひとりで「潜在的な問題が表に出てきて」、その結果として社会の意識が変わったなら仕方ない。うーん仕方がない。国民が自分たちから求めていることですからね。それにまあ、福祉分野ですからオタク文化とは関係のない話ですね……。

でも、ちょっと待ってください。仁藤氏を追っている人ならわかるかと思いますが、2013年から2018年の間に出た仁藤氏の著作のタイトルで、「社会的孤立」に似たキーワードを目にしているはずですよ。

仁藤夢乃

女子高生の裏社会

「関係性の貧困」

に生きる少女たち



「うちの孫がそんなことをするはずがない」

「うちの子には関係ない」

「うちの生徒は大丈夫」

「うちの地域は安全だ」

そう思っている

大人にこそ、読んでほしい。



資料 10 : 『女子高生の裏社会～「関係性の貧困」に生きる少女たち～』(2014 年 8 月 20 日初版 1 刷発行、同年 9 月 12 日電子書籍版発行)

そう、現在のオタク批判者としての仁藤氏の原点となった本です。これ、よく『女子高生の裏社会』と略されますが、実は副題の「関係性の貧困」の方が重要なんですね、おそらく。

「関係性の貧困」は福祉思想で「社会的孤立」の関連用語としてよく使われるキーワードのようです。詳しくはないのですが、欧米の社会学、特にホームレス研究で使われる学術用語から輸入したもののようで、それぞれ英語では"poverty of relationships"と"social isolation"というらしいです(ググると両方の単語を含むページとして"European Journal of Homelessness"や"IHD Research Lab: Loneliness"などのお堅い学術サイトが出てきます)。

資料 2 で見たように、ホームレス支援の第一人者である奥田氏は「関係的困窮」(poverty of relationships の翻訳揺れでしょう)の解決をかねてから提唱しており、「関係性の貧困」は奥田氏とその盟友の村木氏の影を思わせるワードチョイスです。

では、「生活困窮者自立支援法」を念頭において、中身をもう一度読んでみます。副題の「関係性の貧困」自体は(当たり前ですが)何度も目立って出てくるので、ここでは村木氏こだわりのキーワードである「孤立」の方に注目してみます。

この頃から、観光案内を名目に街で客引きをする少女が増えていった。摘発を逃れるため、店舗を構えない「JKお散歩」が急増したからだ。この春、大学を卒業し、孤立する少女の問題に取り組もうとしていた私の目には、彼女たちの姿が留まった。私は、少女に危険を伝えるため、ブログに「お散歩」や「リフレ」に関する記事を書いた。

JKRリフレやお散歩で働く少女の多くは、家庭から排除されている。家庭が貧しく経済的に困窮していても、誰にも頼れず苦しんでいても、虐待やネグレクトを受けていても、彼女たちはきれいな服を着ておめかしをするため、「貧困」や「孤立」状態にあることには気づかれぬ。

性被害に遭ったとき、誰にも頼れず苦しむ女性は多くいる。高校時代の私の友人も、男に強姦されたことから精神状態が不安定になった。彼女の両親は心配したが、娘が傷ついている理由がわからずすれ違い、家族はバラバラになってしまった。誰にも言えない経験から、少女が家族や学校、社会から孤立してしまふことは少なくない。

中学3年生のとき、両親の離婚で家庭が荒れる中、アヤは最後の試合で怪我をして、推薦を取り消されてしまった。急遽転校を迫られ受験勉強することになったが、家庭環境的にも精神的にも余裕はなく、とりあえず合格した高校に進学することになった。進学してからも、ほつとできる場所がなかったという彼女は夜眠れない日が続き、授業中に寝てしまい注意されるようになった。だんだん教員たちから厳しく接せられるうちに、学校の中で孤立していった。そして、同じように学校で孤立する少女たちと過すようになった。

また、高校生世代の子どもたちは、困窮状態にあり孤立していても、本人の意思や親権問題が絡んで現存の支援には繋がらないことも多い。たとえば親との関係がどんなに悪く、生活がボロボロでも、児童養護施設やシェルターには入りたくないと主張する子どもは多い。「JKリフレ」や「お散歩」は、孤立した少女に生活支援を提供している。仕事の他に住むところや食べるものを提供し、役割とやりがいを持たせ、学習支援まで行う店もある。

孤立した青少年が困窮状態のまま親になっていくと、貧困が再生産されていく。連鎖を断ち切るか、新たな連鎖を生むかの分かれ道のこの時期、彼女たちが搾取的な労働に流れ着かず済むよう、生活保障や学び直しの機会の充実と周知、就労に向けた具体的なサポートが必要だ。

私は、表社会のスカウトに、子どもと社会をつなぐかけ橋になりたい。声を上げることではないすべての子どもたちが「衣食住」と「関係性」を持ち、社会的に孤立しない社会が到来することを目指したい。

自立することは孤立することではないと、私たちは人生の後輩である子どもたちに伝えなければならぬ。

ワード出現数

「孤立」：10回

うち

「社会的孤立」(に準じる表現)：2回

「孤立」+「困窮」：3回

資料 11：『女子高生の裏社会～「関係性の貧困」に生きる少女たち～』中の「孤立」出現箇所

すると、「孤立」が文に出現した回数が10回ありました。さらに、当時としては珍しいはずの「社会的孤立」に近い表現が2回あります。しかも、「孤立」と同じ段落に「困窮」という言葉が現れるのが3回あるのですが、これは「生活困窮者自立支援法」を思わせるような言葉の選び方です。

かなり怪しいのですが、でもまあこれだけだと、仁藤氏特有の文体って可能性もあります。仁藤氏は社会学部卒ですから、もしかしたら当時はまだ学術用語だった「社会的孤立」について真面目に学んだことがあって、文章に染み付いていた、と言えなくもありません。

では、前年に書かれた『難民高校生』ではどうか？ こっちはもっと面白いですよ！

仁藤夢乃『難民高校生：絶望社会を生き抜く「私たち」のリアル』
電子書籍版(2014年12月12日発行)
底本は第2刷(2014年11月25日発行)

当事者として語ることでできない若者たちに、大人は姿勢で語りかけてほしい。自分が大切にしたいと思うものを大切にしたり、自分の問題意識に沿って活動したり、どんな思いでどんな生き方をしているのか、その姿を若者に見せてほしい。中卒で働いてきたからわかることや、高校時代に真面目だったからわかること、大学生だからわかることや、新米主婦だからわかること、ベテラン主婦だから言えること、キャリアウーマンやサラリーマンだから思うこと、自営業をしているから言えること、東京で暮らしているからわかることや、地方出身者だから言えること、おじいちゃんだから言えることやおばあちゃんだから言えること……。それぞれ、さまざまな立場にあたり違った経験を話してきているからわかることや言えることがある。あなただからできることは、必ずあるはずだ。

2013年3月、私はO.S.E.O.を法人化し、**孤立し困窮状態**にある少女を支える活動をはじめた。大学卒業後も、高校生世代の子どもたちに目を向け、彼らのリアルに向き合い続けるつもりだ。

この本の執筆は、自分と向き合わなければならない、とても苦しい作業であった。ここには書けないことも、たくさんあった。

私は、この本を書くことを通して、「当事者」から「経験者」になったように感じている。

これからも、「難民高校生」や「難民高校生予備軍」の子どもたちの存在や、彼らの抱える問題を発信し続けたい。大人たち一人ひとりに「居場所のない高校生」たちの問題を、単なるダメな子の「個人的な問題」や、「若者だけの問題」として捉えるのではなく、自分たちがつづっている「社会の問題」「次の世代につながる問題」として認識してもらいたい。

私はこれからも「若者と社会をつなぐきっかけの場づくり」をしていく。その繰り返しが、高校生たちの新たな「溜め」となり、若者たちの可能性を信じる大人を増やすことにつながり、分断された若者と大人の橋渡しにもなると考えている。

最後に、私が大切にしている言葉を紹介したい。

私がコスモ生の頃、農園で阿蘇さんは種刈りのとき、毎年私たちに一人一本の種をもたせ、そのうち一つの種に実った種の数を数えさせた。一本の種には百数十粒の種ができていた。次に、種の数と種から出ている穂の数を掛けると、一本の種には3000粒ほどの種ができていくことがわかる。阿蘇さんはそれを人生にたとえて、こんなことを言っていた。

第1版第1刷(2013年3月5日発行)

当事者として語ることでできない若者たちに、大人は姿勢で語りかけてほしい。自分が大切にしたいと思うものを大切にしたり、自分の問題意識に沿って活動したり、どんな思いでどんな生き方をしているのか、その姿を若者に見せてほしい。中卒で働いてきたからわかることや、高校時代に真面目だったからわかること、大学生だからわかることや、新米主婦だからわかること、ベテラン主婦だから言えること、キャリアウーマンやサラリーマンだから思うこと、自営業をしているから言えること、東京で暮らしているからわかることや、地方出身者だから言えること、おじいちゃんだから言えることやおばあちゃんだから言えること……。それぞれ、さまざまな立場にあたり違った経験を話してきているからわかることや言えることがある。あなただからできることは、必ずあるはずだ。

2013年3月、私はO.S.E.O.を法人化した。渋谷に女子高生が安心して立ち寄れる「コラボスペース」をつくり、大学生とともに行う高校生を対象とした全国初の「高校生ボランティアセンター」の運営もはじめた。大学卒業後も高校生や大学生などの若者に目を向け、彼らのリアルに向き合い続けるつもりだ。

私は、「難民高校生」や「難民高校生予備軍」の子どもたちの存在や、彼らの抱える問題を発信し続けたい。大人たち一人ひとりに「居場所のない高校生」たちの問題を、単なるダメな子の「個人的な問題」や、「若者だけの問題」として捉えるのではなく、自分たちがつづっている「社会の問題」「次の世代につながる問題」として認識してもらいたい。

私はこれからも「若者と社会をつなぐきっかけの場づくり」をしていく。その繰り返しが、高校生たちの新たな「溜め」となり、若者たちの可能性を信じる大人を増やすことにつながり、分断された若者と大人の橋渡しにもなると考えている。

最後に、私が大切にしている言葉を紹介したい。

私がコスモ生の頃、農園で阿蘇さんは種刈りのとき、毎年私たちに一人一本の種をもたせ、そのうち一つの種に実った種の数を数えさせた。一本の種には百数十粒の種ができていた。次に、種の数と種から出ている穂の数を掛けると、一本の種には3000粒ほどの種ができていくことがわかる。阿蘇さんはそれを人生にたとえて、こんなことを言っていた。

資料 12：『難民高校生：絶望社会を生き抜く「私たち」のリアル』「おわりに」各版比較

Kindle で『難民高校生』を「孤立」「困窮」で検索すると、それぞれ一箇所だけヒットします。数は少ないのですが、Colabo 法人化の趣旨について、「孤立」し「困窮」状態にある少女を支えるため、と述べていて、一箇所とはいえど、とても重要な一文です。

なんだ、やっぱり仁藤氏は以前から「孤立」や「困窮」といった社会的問題に関心を持っていたんじゃない……と思うのは早計です。

実は電子書籍版（2014 年 12 月 12 日発行）は紙媒体の第 2 刷（2014 年 11 月 25 日発行）を底本としていて、2013 年 3 月 5 日に発行されたオリジナルの第 1 刷では、全然内容が違っているんですよ（Amazon の「試し読み」から丁度その箇所を読むことができます）。第 1 刷では、「コラボスペース」や「高校生ボランティアセンター」などの活動が主に言及されていて、仁藤氏が目を向けたい対象も高校生だけではなく大学生も含まれています。「孤立」「困窮」とは一言も言われていない。

一応、第 1 刷と第 2 刷で内容が違うのを仁藤氏は別に隠していた訳ではなく、重版の際に「違和感があったフレーズ」を変えたというのは明言しています（https://twitter.com/colabo_yumeno/status/540485572486107136）。

とはいえ、Colabo の一般社団法人化の動機という、一番変えてはいけないはずのところが、「違和感があったフレーズ」を修正したというレベルではなく大胆に改変されているのです。団体の存在意義そのものを犠牲にしてまでも、どうしても「孤立」と「困窮」というキーワードを入れたかったんですね。

こんな（普通の人からすれば）些細な言葉を無理矢理ねじこむことで喜ぶ人間なんて、この世にたった二人しか存在しないでしょう。

村木厚子氏と奥田知志氏です。

出会った人たちと共につくる活動

当事者主体の支援をどう広めるか

奥田知志×仁藤夢乃

Colaboの理事で、生活困窮者支援をしてきた牧師でNPO法人抱樸ほうぼく理事長の奥田知志さんと、若年女性支援をどう広げるか、これからのColaboの活動の方向性について語り合います。

◆奥田知志

牧師。北九州市において生活困窮者への伴走型支援を行なっている認定NPO法人抱樸理事長。学生時代から「ホームレス」支援に携わる。現在、東日本大震災被災者支援「共生地域創造財団」理事長なども兼任。2015年から一般社団法人Colabo理事。

——Colaboの理事になったきっかけは？

奥田…2014年、仁藤さんが福岡での講演に合わせて抱樸に来て、わが家に泊まってくれたのが出会いました。

私たち抱樸は2000年あたりから「伴走型支援」が必要だと言っていて、その話をしたときに、仁藤さんが「ヤクザのほうがよく、ぼど伴走型だ」と話していたのが印象的でした。そこには居場所や食いぶちがあったり、女の子を囲って働かせるにしても、店で一つトラブルが起これると、本人に合わせて他の店にさっ

資料 13：仁藤夢乃『当たり前の日常を手に入れるために——性搾取社会を生きる私たちの闘い』（2022年9月1日発行）奥田知志×仁藤夢乃 対談

では、村木氏と奥田氏はそれぞれのタイミングで仁藤氏に介入したのでしょうか？ 奥田氏については、仁藤氏の最新刊に一応の答えがあって、仁藤氏の2014年福岡講演に合わせて抱樸に来て貰ったり自宅に泊めたりしたのが出会いの始まりとしてします。



資料 14：仁藤氏による 2014 年の福岡県での講演に関するツイート

では 2014 年のいつ頃だったかという、本人のツイートによれば、仁藤氏が 2014 年に「福岡県」で講演したのは、6 月 1 日に福岡市、11 月 21 日に久留米市、11 月 22 日に北九州市の計 3 回です。このうち、奥田氏が「福岡での講演」と言ったのは 6 月 1 日の「福岡市」で

の講演のことでしょう。他県の間人ならいざしらず、奥田氏は福岡県北九州市の間人ですから、北九州市なら「北九州での講演」、久留米市なら「久留米での講演」と言うはずでず。

実際、仁藤氏のツイートを見ると、福岡市での6月1日の講演の次に場所を確認できるのが6月6日の横浜市戸塚区なので、この間のどこかに抱樸と奥田氏の邸宅を訪問したのでしよう。

奥田氏の発言をひとまず信じるとすると、4月ごろに村木氏の(?)指示で仁藤氏のキャラが激変→(村木氏のツテで?)6月初頭に奥田氏と知り合う→8月に村木氏・奥田氏の息のかかったゴーストライターが仁藤氏名義で『女子高生の裏社会』を発行→11月にあとがきを変えた『難民高校生』第2刷を発行という流れですかね。

また、エコーニュースさんの調査で、『女子高生の裏社会』は、明学大教授の石原俊氏が友人で光文社編集の山川江美氏のコネを通じて光文社に企画を持ち込んだことが明かされています(<https://echo-news.red/Studies/I-save-you-was-the-promise-gave-to-alleged-safe-place-of-souls>)。とすれば、この本の書籍化の流れは、村木氏(もしくは奥田氏)→その周辺のゴーストライター→猪瀬浩平氏(明学大准教授・Colabo理事(当時))→石原俊氏(明学大准教授(当時))→山川江美氏(光文社編集)→光文社という感じでしょうか。

以上をまとめると、2014年4月頃に誕生した、オタク文化を性的搾取として批判する正義のフェミニスト仁藤夢乃氏は、村木氏がプロデュースした存在でしょう。

それは別にオタク文化が憎かった訳ではなく、「社会的孤立」「関係的困窮」という概念を世間に浸透させ、日本にはこれらの問題が蔓延している、というストーリーを作るために、叩きやすい秋葉原を標的にしたものと思われます。ナニカグループが叩きやすそうなコンテンツばかり叩いているのは暇空さんもお気づきの通りです。

いま思想として表世界でホットなフェミニズムも、村木氏にとっては概念の中継地点に過ぎないでしょう。村木氏の本丸の概念は「社会的孤立」と「関係的困窮」であって、フェミニズムはたとえば「男性優位社会にはびこるミソジニーによって女性は孤立し困難な問題を抱えがちである」のような形で全てを最後は「社会的孤立」と「関係的困窮」という問題に落とし込むための手段だと思ひます。

そして、村木厚子氏の当初の目的は2018年の「生活困窮者自立支援法」改正に「社会的孤立」という曖昧なワードを盛り込むことだったかと推測します(なお、この「当事者たち」の訴えによって条文の文言が「正しい」方向に改正される、という台本は村木氏の好むストーリーのようで、『かつこいい福祉』によれば、2011年の障害者基本法改正のときも、「福

祉の増進」を「共生」に書き換えたそうです)。この「生活困窮者自立支援法」改正が上手くいったので、その続編として「困難女性支援法」を作ったのでしょう。

これは時期から見てもはっきりしていて、

2018年4月27日：第196回国会「生活困窮者自立支援法」改正案、全会一致で衆院通過（正式な成立は6月8日）

2018年5月28日：厚労省「子ども家庭局」が「若年被害女性等支援モデル事業の実施について」を通知（後の「若年被害女性等支援事業」）

2018年7月30日：厚労省「困難な問題を抱える女性への支援の在り方に関する検討会」第1回（後の「困難女性支援法」）

と、ちょうど「生活困窮者自立支援法」改正成立の目処が立ってから次々に、今の「若年被害女性等支援事業」「困難女性支援法」に繋がる行動を開始しています。

村木氏自身も認識しているように、このスキームの要点は「曖昧であること」です。「社会的孤立」も「関係的困窮」も「困難女性」もどうとでも取れる定義なので、有識者会議やモデル団体などの一部の人間によって、救うべき対象および公金の補助を得て支援活動をする組織を、独占して選定することができます。

令和5年度 厚生労働省予算案における重点事項（ポイント）	
Ⅲ. 安心できる暮らしと包摂社会の実現	
地域共生社会の実現等 すべての人々が地域、暮らし、生きがいを共に創り高め合う地域共生社会の実現に向けて、地域住民の複雑化・複合化したニーズに対応するための包括的支援体制の整備のほか、生活困窮者への支援、障害者支援の推進、困難な問題を抱える女性などへの支援に取り組む。 ○相談支援、参加支援、地域づくりの一体的実施による重層的支援体制の整備促進 352億円(261億円) ▶ 属性を問わない相談支援、多様な参加支援の推進、地域づくりに向けた支援を一体的に行う重層的支援体制整備事業の実施 等	○困難な問題を抱える女性への支援 23億円(22億円) ▶ 都道府県基本計画の策定支援等による困難な問題を抱える女性に対する支援体制の強化 ○障害者支援、依存症対策の推進 1兆5,303億円(1兆4,433億円) ▶ 障害福祉サービス事業所等の整備、障害者情報アクセシビリティ・コミュニケーション施策推進法の成立を踏まえた意思疎通支援事業等の充実をはじめとする地域生活支援の拡充 ▶ 精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築 ▶ 地域における依存症医療・相談支援体制の整備、民間団体の支援 等
○生活困窮者自立支援、ひきこもり支援、自殺総合対策等の推進 744億円(783億円)、R4補正164億円 ▶ 一時生活支援事業・地域居住支援事業の更なる推進等による居住支援の強化 ▶ 就労体験等の活用促進に向けて受入企業への支援の充実等を行うモデル事業の実施 ▶ 地方公共団体と連携したハローワークにおける生活困窮者等に対する就労支援の推進 ▶ ひきこもり支援従事者のスキル向上、支援者自身のケアの確保 ▶ ゲートキーパー養成・支援の充実、地域における自殺未遂者支援の強化 等 ・自治体、NPO等による生活困窮者支援、自殺対策の取組等への支援 等 ※ 生活保護基準の見直し： 生活扶助基準について、検証結果を適切に反映することを基本としつつ見直しを行う。その上で、足下の社会経済情勢等を踏まえ、令和5～6年度については、以下の臨時的・衡量的な対応を行うこととし、令和5年10月から実施する。 ・検証結果による額1,000円/人を加算 ・加算後もなお現行の基準額から減額となる世帯は現行の基準額を確保	水道の基盤強化 ○水道施設の耐震化、水道事業の広域化、IoT活用等の推進 372億円(387億円)、R4補正371億円 ※他府県分を含む ・水道施設の耐災害性強化等 職業者遺骨収集等の推進 ○現地調査・遺骨収集の計画的実施、DNA鑑定の実施、新たな鑑定技術の研究推進・活用等 33億円(33億円)
○成年後見制度の利用促進・権利擁護支援の推進 8.1億円(6.4億円) ▶ 都道府県による市町村支援と中核機関のコーディネート機能の強化等による地域連携ネットワークづくりの推進 ▶ 意思決定支援等の充実と新たな権利擁護支援策構築に向けた取組実施 等	安心してける年金制度の確立 ○持続可能で安心してける年金制度の運営 13兆78億円(12兆6,857億円) 被災地における福祉・介護サービス提供体制の確保等 ○被災地における福祉・介護サービス提供体制の確保、被災者・被災施設の支援、雇用の確保、原子力災害からの復興への支援等 114億円(119億円)

資料 15：『令和5年度厚生労働省所管予算案関係』（<https://mhlw.go.jp/wp/yosan/yosan/23syokanyosan/index.html>）：「令和5年度予算案のポイント」Ⅲ. 安心できる暮らしと包摂社会の実現

では、なぜナニカグループからの Colabo のページが遅いのか、村木氏が何ですぐに仁藤氏をページできていないのか。

ここからはちょっと不確定要素が強くなりますが、もし仁藤氏がゴーストライターの存在と「社会的孤立」という概念のステマの件を暴露したら、「困難女性支援法」だけではなく、「社会的孤立」の文言を盛り込んだ 2018 年の「生活困窮者自立支援法」改正まで村木氏への責任が波及するからだと思います。

「困難女性支援法」は表向き旦那さんが有識者会議の構成員として参加しているだけで、「若草プロジェクト」も村木氏は代表理事そのものではなくただの代表立ち上げ人ですから、この 2 つが燃えても、適当な言い訳で村木氏はぎりぎり逃げることができます。一方、「生活困窮者自立支援法」は村木氏が社会・援護局長～厚労事務次官だった現役時代の肝煎りの案件。他 2 つに比べて、この法律は村木氏のライフワークの一つと言っていいし、ここにダメージが出ればもろに村木氏の責任になる訳です。村木氏にとって、これは絶対に避けたい。

しかも、令和 5 年度の予算案では、生活困窮者自立支援とその関連政策に 744 億円の予算が動いています。現時点では、予算 23 億円の困難女性支援よりもずっと大型の案件です。

水面下では多分、どうやって Colabo 解体を軟着陸させるか、Colabo 爆破後の仁藤氏のポストをどうするかで、二人のぎりぎりの交渉が続いてるんだと思います。もし仁藤氏が暴露して二人が一蓮托生で燃え上がったなら、村木氏の方が失うものが多い分、もしかすると仁藤氏の方が強気に出ていることだって有り得る気がします。

また、藤田氏が自身について「(仁藤氏からは) 距離を意識的にとっている部外者」と言ったことに仁藤氏が突っかかっていったのは、藤田氏が「生活困窮者自立支援法」審議会の時点で村木氏と奥田氏に繋がる人物だったことと関係がありそうな気がします。特別な身内だからマッチポンプしてるだけなのか、それとも逆に今更自分と村木氏と奥田氏を裏切ったらどうなるかわかるよな、みたいな脅し行動なのかはわかりませんが、左派仲間でも特に藤田氏だけに当たりが強かったのは何か理由があるかなと。

村木氏がぎりぎりまで仁藤氏を切れないという予想が正しければ、仁藤氏・Colabo との対決は思ったより長期戦になるかもしれません。